

『長短抄』注釈Ⅳ

廣木一人・嘉村雅江・寺尾麻里・ボニー・マックルアー
新田杏奈・生田慶穂・浅井美峰・ノット・ジェフリー

【はじめに】

本稿は、『長短抄』中巻部後半の校訂本文と注釈である。青山学院大学大学院の廣木一人ゼミにおける『長短抄』研究の成果の一端をまとめたもので、廣木一人・嘉村雅江・寺尾麻里・ボニー・マックルアー・新田杏奈・生田慶穂・浅井美峰・ノット・ジェフリーが分担で執筆し、寺尾が全体の加筆訂正と統一を行い、廣木が最終的な加筆訂正を行った。

本グループは既に二条良基連歌論の研究として、『九州問答』注釈Ⅰ～Ⅱ（『緑岡詞林』二七号～二八号、二〇〇三年三月～二〇〇四年三月）・『連歌十様』注釈（『緑岡詞林』二九号、二〇〇五年三月）・『撃蒙抄』注釈Ⅰ～Ⅲ（『緑岡詞林』三〇号～三二号、二〇〇六年三月～二〇〇八年三月）・『知連抄』注釈Ⅰ～Ⅳ（『緑岡詞林』三三号～三六号、二〇〇九年三月～二〇一二年三月）を、梵灯庵連歌論の研究として『梵灯庵主返答書』注釈Ⅰ～Ⅲ（二〇一三年三月～二〇一五年三月）・『長短抄』注釈Ⅰ～Ⅲ（『緑岡詞林』四〇号～四二号、二〇一六年三月～二〇一八年三月）をまとめている。適宜御参照されたい。

なお、翻刻掲載にあたり、許可を下さった天理大学附属天理図書館には、記して感謝を申し上げる。

【凡例】

○『長短抄』の底本は、天理大学附属天理図書館蔵「長短抄」（天理大学附属天理図書館本翻刻第1185号）を用いた。同本は表紙左肩に外題「長短抄 中」と記す。同本の影印が天理図書館善本叢書と書之部第七巻『連歌論集』（八木書店、昭和四十八年七月）に所収、翻刻が岩波文庫『連歌論集上』、『俳書叢刊』第一巻（臨川書店、昭和六十三年五月）に所収。ほか、謄写本に東京大学史料編纂所蔵のものがある。

○底本文は内容ごとに章段が区切られているが、それをさらに内容によって私に章段を区切り、各章段冒頭に《》の中に私に段の通し番号と章段名を記した。

○底本の欠脱部や文意が通じない箇所に関しては、必要最小限の改訂を行い、校訂本文を作成した。校訂を行った箇所は右傍に【】

を付し、その中に底本の状態を記し、注釈で校訂の内容を説明した。

○底本の判読が不能な箇所に関しては、■で示した。その箇所を校訂によって補った場合には、右傍に■を付し、注釈で校訂の内容を説明した。その際、他の翻刻書を参考とした場合には、注釈に取り上げた。扱った翻刻書とその略号は左記の通りである。

〈岩波文庫〉：伊地知鐵男編『連歌論集上』（岩波書店、一九五三年）所収の翻刻。

〈俳書叢刊〉：天理図書館綿屋文庫編『俳書叢刊 第一巻』（臨川書店、昭和六十三年）所収の翻刻。

○底本文にふりがながある箇所に関しては、そのふりがなをカタカナで表記し、注釈で説明した。

○その他の本文改訂は左記の方針で行った。

- ・私に濁点、句読点を付した。
- ・旧漢字体のものは現行の字体に改めた。
- ・送りがなを私に付した。その際には該当部分に傍点を付した。
- ・原本は漢字・カタカナ表記であるが、カタカナは平仮名に直した。適宜漢字の部分を平仮名に、仮名の部分を漢字に直した。ただし、元の表記が仮名であったところはその仮名を、漢字であった所はその漢字を、ルビに残した。
- ・踊り字はすべて開き、原型をルビに残した。ただし、適宜ルビに濁点を付した。

・本文において、漢文体で書かれている部分は、私に書き下し、原型をルビに残した。

・本文において歴史的仮名遣いに誤りがある際には、それを改めて右傍にルビで底本表記を付した。また、漢字に宛て換えた場合は、ルビにおいてそれを改めて、底本の表記は「」内に記した。

・校注者が読解の便宜のために付したルビは（ ）に入れて示した。

・本文中において、和歌や句の引用には（ ）を、作品名には『 』を付して示した。それ以外で語句や文を括る必要がある場合には、「 」を用いた。

・本文中の割り注・傍注の部分はその部分を（ ）に入れて示した。

○本文中の連歌・和歌に、私に巻頭から一句（一首）ごとに順に番号を算用数字で付した。

○各句・歌ごとに、番号を算用数字で（ ）に入れて記し、「解説」ならびに「現代語訳」の項を設けた。句と句とが付合である場合には、前句と付句とを一对で扱い、「解説」に代わって「付合」の項を設けた。出典や他出等を示す必要がある場合には、「備考」の項を設けた。

○引用文献は読解に不便な漢字・仮名は適宜宛て換え、送り仮名を送り、漢文は書き下して、できるだけ読み易い表記とした。

てには『がある。

*9 下は、三七三七、吉し。二七、悪し 底本の「三七々々」が「三七三七」か「三七七七」か分らないが、ここでは仮に前者とした。

この「三七」の繰り返しは誤写か。発句の音をどのように区切つて詠むか、ということかと思われるが不審。「三七」が「三と七」だとしても「二十一」だとしても意味が判然としない。「二七」についても同様である。

*10 但し句による 但しそれも句による。底本では「但ニヨル」とありその右に「句」と書かれているが、内容を考えて「但」の下に「句」を入れ込んだ。

*11 「梓弓」・「祝」、差し出でぬが良きなり 「梓弓」や「祝」について詠む時には、その意があまり表面に強く出ないようにするのが良い。「梓弓」は梓の木で作った弓を指し、「い」「いる」「ひく」「はる」「すゑ」などを導き出す枕詞として、「梓弓春の山辺を越え来れば道もさりあへず花ぞ散りける」(古今集・春下・一一五・貫之)のようにも用いられる。ここでは弓としての意味を強く表面に出さないようにするのが良い、としている。「祝」は、「祝ひ」「祝ふ」という言葉を詠む場合ではなく、歌題の「祝」で祝意を詠み込む場合に、それを強調しないように詠むということを言っているか。

*12 「恋衣」、恋に同じ。旅衣、旅に同じ 「恋衣」は恋の意で詠む。「旅衣」は旅の意で詠む。「恋衣」は「恋衣着奈良の山に鳴く鳥の

間なく時なし我が恋ふらくは」(万葉集・巻十二・三〇八八・作者未詳)のように、恋を衣に見立てて詠まれる。「旅衣」も同様に「旅衣たち行く浪ち遠ければいさ白雲のほども知られず」(新古今集・羈旅・九一五・喬然)のように旅の意で詠まれる。

*13 「菅の根の」、長 「菅の根の」は「長」を導き出す。「散りぬべき花見る時は菅の根の長き春日も短かりけり」(拾遺集・春・五七・清正)のように詠まれる。

*14 「秋の夜の」、同 「秋の夜の」は同じく「長」を導き出す。「きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜の長き思ひは我ぞまされる」(古今集・秋上・一九六・忠房)のように詠まれる。

*15 「夏の日」、あつ 「夏の日」は「あつ」を導き出す。「ながながと思ひ暮らせど夏の日のおつかはしきは我が身なりけり」(相模集・二四七)のように詠まれる。(浅井)

《五十四、義理付》

一六、儀理を以て付合あり。上手の好む付合なり。下手は仕らざる得向なり。連歌に云ふ、

162 二人渡れば沈む浮き橋
と云ふ句に、

163 逢ふ人やしばしと言ふに留まるらん

「更々寄合なし。儀理ばかりなり。この意は、二人渡れば沈む橋なり。逢ふ人、「しばし留まれ」と言へば人の留まるなり。これ、橋の儀理にて付くなり。面白き風情なり。また云ふ、

164 開けて悔しき浦島が箱と云ふに、

165 など人の言ひしままには無かるらん

これも、浦島が寄合一つもなし。「開くるな」と言ひしこの箱を悔しく思へる、儀理の付合なり。

【注釈】

*1 儀理を以て付合あり。上手の好む付合なり 道理による付合（方法）がある。これは上手な詠み手が好む付合方法である。「儀理」は道理・理屈の意。

*2 下手は仕らざる得向なり 「得向」は未詳。その語句を除くと、下手な詠み手は使用しない、の意となる。

〈162・163〉

「付合」二人で渡ると橋が沈むという前句に、そのような橋で逢う恋人たちのやりとりを付ける。橋を渡ろうとする相手に「しばらく（待つて）」と言うと、言われたとおりに待っているであろう、ということ。一度に一人しか渡れない橋であるという理屈による付合。付

句は一句としては別れの場面。逢いにきた人に、「しばらく」と引き留めても、留まるものであろうか、という意味に読め、別の場面に転じやすい句である。

「現代語訳」《前句》二人で渡ると沈む浮き橋である。《付句》逢いにくる人に、「しばらく」と言う橋を渡るのをやめるであろうか。

*3 更々寄合なし。儀理ばかりなり 寄合は全くない。理屈ばかりによる付合である。

〈164・165〉

「付合」浦島太郎伝説の玉手箱は開けて悔しいものだという前句に、開けないように乙姫に言われたのに、なぜその通りにしないのか、と付く。開けてはならないという箱の道理に関わる付合。付句は一句としては、約束を守らない恋人との関係を述べたような意に読め、恋に転じやすい句。

「現代語訳」《前句》開けて悔しいことである、浦島の箱。《付句》なぜ人が言ったとおりでないのだろうか。（マックルア）

《五十五、句組の事》

一、句組の事 洛中洛外随分の人々多々誤りあり。心得べきなり。

166 梓弓^{あづさ}斎垣^{いがい}に引くは御しめ縄

⁴⁴この句、句組^{くぐみ}にて人に聞き落^おとさるるなり。師伝なき仕手の句なり。⁴⁵この句の体は、玉の冠を着^きたる人の沓を腰^{こし}に付けたるが如し。

167 梓弓^{あづさ}斎垣^{いがい}にしめを今日引きて

⁴⁶五文字を下にてかやうにあひすらひてこそ始末正しく掛け合ひたれ。他^{ほか}これに准^{こた}ず。

【注釈】

*1句組の事、洛中洛外随分の人々多々誤りあり 句の組立てについて、都の中にも郊外にも、多くの人にたくさん誤りがある。

〈166〉

*2梓弓 ここでは「斎垣」の「い」にかかる枕詞。また、「引く」を導く。

*3斎垣 神社を囲む垣。

【解説】「梓弓」を受けるべき「引く」という語が、バランスの悪い位置に来ているため、句の組立てが悪い例。

【現代語訳】斎垣に引いてるのは御注連縄である。

*4この句：仕手の句なり この句は、句の組立てにより、人が聞い

て悪く思うのである。師の教えを受けていない詠み手の句である。

*5この句の体は、玉の冠を着たる人の沓を腰に付けたるが如し この句の有り様は、玉の冠を被っている人が、靴を腰に付けた状態のようである。「玉の冠」は即位式などの儀式に使う、宝石などで飾った冠。

〈167〉

【解説】〈166〉を修正した例。最初の「梓弓」と最後の「引きて」のバランスを良くしたもの。句の組立てが良いとされる例。

【現代語訳】斎垣に御注連縄を今日引いて。

*6五文字を下にて：掛け合ひたれ 上五を下に於いてこのように対応させることによつてこそ、初めと末尾が正しく関わるのである。「あひすらふ」は「あひしらふ」に同じであろう。「あひしらふ」は程よく対応させる意。
(マックループ)

《五十六、廻してには》

一ハ、廻^{まは}してにはの事、たとへば、後に云ふべきことを先づ云ふなり。連歌云ふ、

168 とこそ言へなほ待ちて見む^み月の比

170 169
とはいかに⁴命も知らぬ⁵後の暮
来ぬ^こものを待てとばかりの暮^暮ごとに

⁶この句組は、「月の比とこそ言へ。なほ待ちて見む」と云へり。「命も知らず後の暮とはいかに」と廻したり。「暮ごとに來ぬものを待てとばかりは」と云ふ句なり。歌に云ふ、

171 思ふことなくてや見まし⁷与謝の海の⁸天の橋立⁹都なりせばとあり。¹⁰「与謝の海の天の橋立都よりせば思ふことなくて見るべきに」と詠めり。¹¹詩・聯句にこのかかりあり。詩・聯句は韻声などといへば、かやうにもあるべけれども、詩歌の一風流なり。¹²この句組、二度三度もすれば人の聞きとることあれば、好むべからず。また云ふ、

172 知らずとよ錦の褥¹³玉の床

¹⁶これもこの句組なれども、さし出づる所なし。かやうには苦しからず。¹⁷下の句にこのかかりあり。

173 鳴くや五月の山ほととぎす
174 知らず今夜の宿はいづくぞ

【注釈】

*1廻してにはの事 「廻してには」は、後に來るべきものを前に出すなど、通常の語順を変更して組み立てる句作方法のこと。述部を文頭に配する、現代の倒置法に相当する方法も含む。

〈168〉

*2とこそ言へ 「と言ふ」を強調する。「とこそ言へ」と詠む歌は、初句に配するもの以外も含め、見出せない。類似の言い回しが見られる例には、「相思ふことこそ人の難からめ我が思ふことを知るとだに言へ」（定頼集・一四〇）、「家の風伝ふる宿のあたりをば陰なびくべき道とこそ思へ」（拾玉集・五一五七）等がある。

*3月の比 望月の前後の数日間。

「解説」「廻してには」の例。「月の比とこそ言へ。なほ待ちて見む」の、「とこそ言へ」を頭に置き、「月の比」を後尾に配する。

「現代語訳」月のころだという。やはり待つて見よう。

〈169〉

*4命も知らぬ 命がいつまで続くかわからない。「命も知ら（ず）」と詠まれた歌は数多く、「暮れ」や「待つ」と結んだ例には「暮れ待たむ命も知らずいは橋のよるとは誰か契りそめけん」（続古今集・恋一・一〇四・行意）等がある。

*5後の暮 次に來る夕方。「いまだにも別れを急ぐ心には後の暮れともえこそ頼まね」（文保三年御百首・二四七九・行房）。

「解説」「廻してには」の例。「命も知らず、後の暮とはいかに」の、「とはいかに」を頭に配する。

「現代語訳」 命がいつまで続くかわからないのに、次の夕暮れというのはどういふことか。

〈170〉

「解説」 「廻してには」の例。「暮ごと」に來ぬものを待てとばかりはの、「來ぬものを」を頭に置き、「暮ごと」に「を」後尾に配する。

「現代語訳」 毎夕毎夕、來もしないのに、待つていてほしいとばかり言つて。

*6 この句組は 以下、〈168〉〈169〉〈170〉についての説明。『長短抄』

著者は「てには」のうち、一句について語句の順序が関わるありかたのことを、「句組」と捉えていることがわかる。

〈171〉

*7 与謝の海 歌枕。「天の橋立」の砂嘴の内外の海のこと、現在の京都府の宮津湾。

*8 天の橋立 歌枕。現在の京都府宮津市にある。与謝の海を東西に分けて延びる巨大な砂嘴。

*9 都なりせば 都であつたならば。反実仮想。底本「ナリセハ」の「ナ」の右傍に「ヨ」とあり。

「解説」 和歌で「廻してには」に相当する例。通常の語順では下句

の内容が先に來るべきところを、入れ換え、倒置する。

「現代語訳」 物思いせずに見ることができると、この与謝の海、天の橋立が都であつたなら。

「備考」 「思ふことなくてぞ見まし与謝の海の天の橋立都なりせば」（千載集・羈旅・五〇四・赤染衛門）。ほか、『統詞花集』。本書と同じ「思ふことなくてや」の形で載るのは、『玄玄集』、『金葉集』三奏本、『歌枕名寄』。

*10 「与謝の海の…べきに」と詠めり 「与謝の海の天の橋立が都であつたなら、あれこれ物思いせずに見ることができると」と詠んだのである。底本「都ヨリセハ」であるが、意が通らない。〈171〉「備考」に挙げた他出からして、「都なりせば」が誤写されたものと考

えられる。

*11 詩・聯句にこのかきり…一風流なり 漢詩・聯句にこの種のこと

ば続きがある。漢詩・聯句では韻声などということがあるので、このようにもあるのは当然であるが、漢詩および和歌の一つの伝統である。漢詩では、平仄や脚韻等のために語句が前後することがある。これに対して、「かようにあるべけれども」と逆接が続くのは、和歌においては好ましくないという考えが念頭にあつたものか。

*12 この句組、二度三度も…好むべからず このような句の組み立てを、何遍もすると他の人が聞いていて耳につくことがあるので、好

むべきではない。

〈172〉

*13 知らずとよ 知らないということだよ。

*14 錦の褥 錦の布で周囲をふちどった敷物。

*15 玉の床 美しく飾った寝所。

「解説」「廻してには」のうち、「さし出づる所」がない例。「錦の褥（も）玉の床（も）知らずとよ」の、「知らずとよ」を句頭に出す。動詞（述部）を文頭に配するもので、現代の一般的な倒置法に相当する。

「現代語訳」知らないということだよ、豪華絢爛な敷物も、美しく飾った寝所も。

*16 これもこの句組なれども…苦しからず 〈172〉の句も「廻してには」であるが、度を越えたところがない。このようにするのは差し支えない。

*17 下の句にこのかかりあり 短句にこのことば続きがある。「このかかり」とは、「廻してには」のなかでも、〈172〉の如く、一般的な倒置法に相当するものを指すのであろう。

〈173〉

*18 山ほととぎす 「ほととぎす」に同じ。

「解説」「廻してには」のうち、「さし出づる所」がない例。「五月の山ほととぎす鳴くや」の「鳴くや」を句頭に出す。〈172〉同様、動詞（述部）を文頭に配する。本歌「ほととぎす鳴くや五月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな」（古今集・恋一・四六九・よみ人しらず）。

「現代語訳」鳴いているよ、五月の山で、山ほととぎすが。

〈174〉

「解説」「廻してには」のうち、「さし出づる所」がない例。「今夜の宿はいづくぞ知らぬ」の、「知ら（ず）」を句頭に出す。〈172〉同様、動詞（述部）を文頭に配する。

「現代語訳」知らないのだ、今夜の宿がどこにあるのか。（寺尾）

《五十七、違ひてには》

一、^九違ひてには、人々^{ちが}好み^{ちが}待るとも初心にては^わ付けにくきてにはなり。^也添ひて^そ付くてには^いだにも退くことあり。まして^も違ひて^{ちが}付くてにはなれば、^也しかと付くこと大事なり。ただし、^也人の心延へ^えまぢまちなれば、^也易きも大事のてにはも人によるべし。いづれもいづれもよくよく心得^{こころ}べきなり。違ひて^{ちが}にはの句、

175 舟の内こそもの憂かりけれ⁷
176 旅人の花ある山を越え過ぎて⁸
また云ふ、^又

177 春なるべくは曙の空⁹
178 袖濡らす夕は秋の習ひにて¹⁰

【注釈】

*1 違ひてには、人々…てにはなり 「違ひてには」は人々が好むものであるが、初心の者では付けにくい付合法である。「違ひてには」は前句と対立するような場所・時節などを付ける付合法。『知連抄』上巻では「たがひてには」とする。『僻連抄』にいう「対揚」、「連理秘抄」の「相對」と同じ。『擊蒙抄』では「春に秋、朝に夕べ、山に野、かやうに対揚する一体なり」として付合例を五例挙げ、「あながち好み用ゆべからず」とする。『連歌秘伝抄』ではこの付合法を「違付」とする。『梵庵主返答書』上巻の「対揚付」の項には、「春の句に秋を付け、朝に夕べを付けたるも、上手は退かぬ様にするなり。うち任せて初心の人のしたらんは心もとなし」とあり、付合例三例を挙げる。

*2 添ひて付くてにはだにも退くことあり 前句の時節などに添わせて付く付合法でも、離れてしまうことがある。本書下巻に「添ひてには」に関する項があり、付合例を挙げ、「かくのごとくに、添ひ

て付く体なり」とする。前句と付句が分離してしまうことを嫌うことは、『九州問答』に「その句の内の肝要の寄合を目に掛けて、およそ、句退かぬやうに付けて、一句をもみもと面白く付くべし」などとある。『和歌集心躰抄抽肝要』には「違ひてには」に関わって、「春に秋を付け、朝に夕べを付けたれども、上手は退かぬなり」とある。

*3 違ひて付くてにはなれば 対立する時節などの語を付ける付合法なので。

*4 しかと付くこと大事なり しつかりと関連を保って付けることが、むずかしく大事である。

*5 人の心延へまちなれば 人の能力はまちまちであるので。

*6 易きも大事のてにはも人によるべし 容易であるか難しい付合法であるかは人によるであろう。

〈175・176〉

*7 舟の内 舟の中にいることをいう。舟は「浮」いているものであるから、「舟の内浪の上にて明けぬめりさても憂き世は過ぐるものとて」（竹風抄・一三八）などと「憂し」「憂き世」などの語を導き出すことが多い。

*8 山を越え過ぎて 山を越え、そこを過ぎていって。歌例に「槇の立つ幾重の山を越え過ぎて里近くなる松の下道」（玉葉集・旅・一

一九七・俊兼)がある。

「付合」前句は舟の中にいることはつらい、と詠む。漁師や渡し舟のように舟の中で生活することをいうか、船旅をいうかは不明である。付句は、舟の内がどうしてつらいのかの具体的状況を詠む。「花」の咲く「山」を越えて、今、舟に乗っているのだ、というのである。海か川に浮かぶ「舟」に「山」を付けた点で、「違ひてには」の例としたもの。

「現代語訳」《前句》舟の中にいるというのはつらいことである。《付句》花の咲いている山を越え、その場所を通り過ぎてしまったので。

〈17・178〉

*9春なるべくは 春であるならば。「くなるべくは」の歌例に、「逢ひ見が夢なるべくは恋しさも憂さもうつつに残らずもがな」(藤葉集・五七〇・頼清)などがある。

*10袖濡らす夕 袖を濡らす夕方。夕露によつて袖を濡らす、ということであろうが、「露」が涙を暗示することが一般である。

*11秋の習ひ 秋の常である。「袖」と結んだ歌例に、「訪はばやな秋の習ひの夕露もいとかく結ぶ袖はありやと」(親清四女集・一八一)、「袖の露は秋の習ひとかこちても絶えぬ涙の置きどころなき」(光経集・三八二)などがある。

「付合」前句は春という季節にふさわしい時間帯の情景を詠む。付

句はそれと対応させて、秋の時間帯およびその折の状況を詠む。今は「秋」であるから、夕方、「袖」を「濡らす」として、「春」と「秋」を対比させた点で、「違ひてには」の例としたもの。『枕草子』冒頭の「春は曙」「秋は夕暮」を踏まえての対応である。

「現代語訳」《前句》春であるならば曙の空がふさわしい。《付句》袖を濡らす夕方というのは秋の常のことである。春ならば、曙の空のもとにいろだるうに。

(廣木)

《五十八、不覚の事》

一、歌を詠むに、¹落題を詠み、²古き歌に詠み合ふなどしつれば、³始め、一首二首、詠みたりつる秀歌も何にてもなし。⁴不覚になるものなり。されば、秀歌は詠み出ださずとも、⁵その日の不覚だになくはと⁶思ひて、⁷当座の歌をば読むべきなり。連歌もかくのごとく、⁸あるまじきてには・詞をしして、⁹人に聞き落とさるる句を、¹⁰一句も仕出だしぬれば、¹¹前に興ある句どもしおきたれども、¹²聞きとり連歌にてありけるよ、などと沙汰せらるるなり。よき句をばせずとも不覚せぬ様に用心をして、¹³人の中の連歌をばたしなむべきなり。されば百韻に十句、十四、五句付く仕手もよき句をば三、四句の間あるべきか。¹⁴毎句によき句はあるべからず。¹⁵ただ、持連歌肝要なり。上手の持連歌は踊らずして詞正しく、ち

と珍しき風情あるべし。下手の持連歌は、¹⁹住吉の松のごとし。口惜しきことなり。^事_也

【注釈】

*1 落題 題意を詠み落とすこと。本書上巻『長短抄』注釈Ⅱ「二
十五、落題（一）」「二十六、落題（二）」参照。

*2 古き歌に詠み合ふなどしつれば 古い歌と同じようなものを詠む
などすると。

*3 始め、一首二首、詠みたりつる秀歌も何にてもなし はじめの頃、
一首か二首詠んだ歌がすぐれた歌であったとしても、何にもならな
い。

*4 不覚になるものなり 歌の上達に失敗するものである。

*5 その日の不覚だになくはと思ひて その日に失敗さえなければと
思つて。

*6 当座の歌をば読むべきなり その当座に詠み得る歌を詠むべきで
ある。

*7 あるまじきてには・詞 ふさわしくないてには、詞。ここでの「て
には」は助詞・助動詞・用言の活用語尾などを指す。本書上巻『長
短抄』注釈Ⅱ「三十、十の風体（三）」に「てには正しき句」とし
て連歌二例、和歌一例が見える。

*8 人に聞き落とさるる句 他人に聞かれて貶められる句。

*9 一句も仕出だしぬれば 一句でも詠んで出したならば。

*10 前に興ある句だもしおきたれども それ以前に興趣のある句など
を詠んだとしても。

*11 聞きとり連歌 聞いていて耳につく連歌、の意か。

*12 沙汰せらるるなり 指摘されることである。

*13 人の中の連歌をばたしなむべきなり 連衆の座の中でふさわしい
連歌を詠むべきである。

*14 百韻に十句、十四、五句付く仕手も 百韻連歌で、十句、十四、
五句付けることのある詠み手も。

*15 よき句をば三、四句の間あるべきか よき句というものは三、四
句の程度であればよいであろうか。ここという「よき句」は有文・

無文（地連歌）論で言われた「秀逸」のこととも読める。『筑波問
答』に「大方、連歌は見苦しからぬ句の心のあるやうなるを地連歌
にして、一座のうち、耳に立つやうに秀逸を二、三句もし侍らんを
こそ、上手のしるしにてもあるべけれ」、『九州問答』「一、連歌有
文無文事」に「堪能は下地無文の連歌をして、四・五句目ごとに有
文の句を交すべきなり」、『連歌十様』に「地連歌はいたくよくなく
とも口軽に散々に付けて、その内に二、三句興ありてすべきなり」
などとなり、詠んだ作品のうちの二句から五句は、という言い方は、
地連歌論の中で主張されている。

*16 毎句によき句はあるべからず 詠む句ごとに秀逸であることはな

いだろう。前注で引いた『九州問答』の続きに「懷紙を取りて見るより、あはやと覚ゆるは秀逸の体なり。目にも立たぬは無文の地連歌なり」とある。

*17ただ、持連歌肝要なり 何はともあれ、持連歌は非常に大切なものである。「持連歌」は「地連歌」のことと思われる。「地連歌」が重要なことは『僻連抄』に、「常の地連歌に詞の幽玄はあらはるるなり」とある。

*18踊らずして詞正しく、ちと珍しき風情あるべし 特別な句を作ろうと昂揚していず、詞を正しく使っていて、少し、珍しい趣向があるようである。

*19住吉の松のごとし 住吉に生えている松のようである。陳腐であることをいう。「住吉」は大阪市にある地名。松原の続く景勝地として知られ、『連歌付合の事』などの連歌寄合書でも、「住吉」と「松」は寄合として掲出られているように、誰でもが連想するもの。

(廣木)

《五十九、錦の袴(一)》

一十、歌に錦の袴を着せよと云ふは、上の句はないが無けれども、下句を魂深く、故も有りて読むべきなり。題を首に拾ひ集めて詠みて、末の句にその題の詞一つも無くして空に詠みなす事、

無下の下手の仕業なり。平題をば惜しみて末の句に置き、せめては中にも置くべし。結題をば上下に斑も無く置きて読むべし。首にぐしぐしと尽くし果てつれば心憎き事なし。例へば「山家の月」と云ふ題に、

179 山里は月の光ぞ隈もなき

などと詠みてんには、今、末の句には何事かあるべき。心憎き事なし。されば、範永が歌に、

180 住む人も無き山里の秋の夜は月の光も寂しかりけり

と詠めりけるを、四条の大納言公任卿は嘗め思して、「範永は誰人ぞ、よく和歌に骨を得たり」と判の詞に書き付けられたり。これらは上の句の中に山家を詠み、下の句に月を賞してこそ詠まれたれ。

【注釈】

*1歌に錦の袴を着せよと読むべきなり 「歌に錦の袴を着せなさい」と言うのは、歌の上の句は何気なく詠むが、下の句は魂が深くこもり、趣もあるように詠むのが良いということだ。「錦の袴」は、錦の布でできた袴で、ここでは和歌の下の句を美しく作ることを表している。「ないげ無(し)」は「なにげなし」のことか。

*2題を首に拾ひ集めて…仕業なり 歌題を歌の最初に残らず集めて詠み、末の句にはその題の言葉が一つも無く空であるように詠むこ

とは、ひどく下手な詠み手の詠み方である。「空」は、ここでは歌題にあたる事柄が無いことを言う。『毎月抄』には、題について「頭にいただきて出でたる歌無念と申すべし」とある。

*3 平題をば惜しみて末の句に置き、せめては中にも置くべし 平題は大切にして歌の末の句に置き、そうでなければ少なくとも中ほどに置くのが良い。「平題」は、結題のように複数のものを詠むことを要請しない、シンプルな題のこと。

*4 結題をば上下に斑も無く置きて読むべし 結題は歌の上の句と下の句に、偏らないように置いて読むのが良い。「結題」は複数の事物や概念を詠むことを要請する題。『長短抄』注釈Ⅲ「《四十五、真結題》にも「結題」に関わる記述がある。『毎月抄』に「題をわかし候事、一字題をばいくたびも下句にあらはすべきにて候。二字、三字より後は、題の字を甲乙の句にわかち置くべし。結題をば一所に置く事は、無下の事にて待るとやらん」とある。

*5 首にぐしぐしと尽くし果てつれば心憎き事なし 歌の最初にぐいぐいと詰め込んで全て詠み尽くしてしまうと、心引かれるところが無い。

〈179〉

「解説」題の内容を和歌の上の句に集中させてしまった例。五七五だが、連歌句ではない。「山家月」という題は、「山家」の様子と「月」

を詠み込むことを要請するので、例えば上の句に「山家」の内容を詠み、下の句に「月」を詠むなど、題の内容を斑無く詠むのが望ましい。しかしこの歌では、題にあたる「山里」と「月の光」が上の句で詠み尽くされ、下の句で詠む題材が無くなってしまっている。

「現代語訳」山里では月の光がくもりもなく輝いている。

*6 範永 藤原範永。平安中期の歌人。生没年未詳。『後拾遺集』以下の勅撰集に三〇首入集。家集『範永集』。範永の歌を公任が誉めたという話は、『袋草子』や『十訓抄』、『悦目抄』、『宝物集』等に見られる。『袋草子』によると、遍照寺で範永が〈180〉「すむ人も」の歌を詠み、その詠草を定頼が父公任に送ったところ、深く感歎して「範永とは誰人ぞや。和歌その体を得たり」とその紙に書き入れた、とある。

〈180〉

「解説」題を歌の上の句と下の句に斑無く分けて詠んだ歌の例。「山家月」という題だという記述は無い(『十訓抄』には「山家秋月」という題で詠んだ、とある。)が、歌の内容としては、上の句に「山家」の様子、下の句に「月」を詠んでいる。「住む人」の「すむ」に、月の光が「澄む」意を響かせている。

「現代語訳」住む人もいない山里の秋の夜は、澄んだ月の光も寂し

い様子である。

【備考】後拾遺和歌集、金葉和歌集三奏本、範永集（初句「見る人も」）等に掲載。説話については《注6》参照。

*7 四条の大納言公任卿 藤原公任。平安中期の歌人。康保三（九六六）年（長久二（一〇四一）年。家集『公任集』、歌学書『新撰髓脳』など。

*8 判の詞 《注6》に挙げた説話の中に見られる、詠草に公任が書き付けた言葉のこと。歌合の判詞ではない。（浅井）

《六十、錦の袴（二）》

¹連歌もまたかくのごとし。²連歌には玉の冠を着せよと云ふなり。連歌五文字大事なるが故に玉の冠を着せよと云ふなり。³玉の冠ならばとて雪花月または恋・述懐の良き詞を五文字に打ち出だすことあるまじきなり。⁴幾度も景物をば中・下に置きてしたる連歌よく候ふなり。⁵韻の字などに指し合ひて思ふ様になからんときは、よく取りなして上にも置くべし。かくのごとく心得ぬるは苦しからず。一つに定むるは心下手なり。

⁷歌には錦の袴を着せよと云へり。連歌には玉の冠といへる事、

⁸二つあるまじき体なり。錦の袴を着たらん人の、⁹菅笠着て、肩脱ぎしたらんは良かるべきか。錦袴を着ば、玉の冠着てこそ似合ふべけれ。また玉の冠を着たらん人の、¹⁰脛上げしては、見られべきものか。錦の袴を着てこそかけあふべけれ。了簡あるべし。¹¹玉の冠を着せよと云ふ事は、

¹²花を見て ¹³花散りて ¹⁴花咲きて ¹⁵月を見て ¹⁶月入りて
¹⁷月更けて ¹⁸雪降りて ¹⁹雪を見て ²⁰雪待ちて ²¹松の雪
²²富士の雪 ²³身を捨てて ²⁴世を捨てて ²⁵人待ちて ²⁶雨降りて
かくのごときの体の詞は下に置きてこそ良かるべけれ。五文字に然るべからず。これにかけあふべき五文字こそ、玉の冠とは云ふべけれ。この類の詞こそ、錦の袴とも云ふべきか。これにて大方をまづ心得べし。

【注釈】

*1 連歌もまたかくのごとし 連歌も和歌同様「錦の袴」を大事にすべきだ。ここでは前項の内容を受けて、五七五句において下五に大事な詞を詠むべきだということ。

*2 連歌には玉の冠を…と云ふなり しかし連歌では特に上五に大事な詞を詠めというのである。それは連歌では上五を大事にするためである。「玉の冠」は《五十五、句組の事》参照。

*3 玉の冠ならばとて…あるまじきなり だからといって「玉の冠で

あるならば」と言つて雪月花、または恋や述懐のようなよい詞をはじめの五文字に出すようなことがあつてはならないのである。

*4 幾度も景物をば中・下に置きてしたる連歌よく候ふなり どのような場合であつても雪月花のような景物を中七や下五において詠んだ連歌句はよいものである。

*5 韻の字などに：置くべし 句が指し合つて結語の字などと重なつて思うようにいかないようなときには、うまく取りなして、これらの景物を上五の五文字に置くのがよい。「韻」はここでは結語のことを指す。

*6 かくのごとく心得ぬるは：下手なり このように柔軟に心得ているのはよろしいことであり、あくまでも下五に景物を置こうとこだわっているのは却つて心得が悪いのである。

*7 歌には錦の袴を着せよと云へり 和歌では下の句に「錦の袴」を着せよと言われている。「錦の袴」は前項《五十九、錦の袴（一）》参照。

*8 二つあるまじき体なり 連歌においては「玉の冠」と「錦の袴」は二つに分けられるものではない。

*9 菅笠を着て、肩脱ぎしたらんは良かるべきか 「玉の冠」ではなく菅笠を着て肩脱ぎをしているのはよいものであろうか。そのように下五が美しくとも上五・中七がよろしくない連歌句を詠んではない。

*10 脛上げしては、見られべきものか 「錦の袴」ではなく脛上げしているのは見られたものであろうか。そのように上五が美しくとも

下五がそれに見合うようなものでない連歌句を詠んではいけない。

*11 玉の冠を着せよと云ふ事は、：然るべからず 上五に「玉の冠」を着せよとはいつても、これらのような詞は上五におくべきではなく、下五において詠んでこそ良い語である。

*12 花を見て 連歌例に「上に残るは袖の月影／紫のゆかりの草に花を見て（成種）」（菟玖波集・雑一・一一二五）。

*13 花散りて 連歌例に「夢の契りも別れなりけり／あしたには雲となりぬる花散りて（貞嗣）」（菟玖波集・雑一・一〇七一）。なお一三八七年以前に成立したと考えられる『至徳以前百韻』は「花散りて後さへものを思ふかな／今幾日かは春の曙」（至徳以前百韻）「はなちりて」存疑・一／二の発句を詠んでいる。

*14 花咲きて 連歌例に「一年ながら四つるときあり／雪降れば皆白山の花咲きて（尊胤）」（菟玖波集・雑一・一二〇六）など多数。また「憂き世の友の我を訪ひつる／花咲きてなど隠れ家の無かるらむ（道誉）」（菟玖波集・雑一・一〇四四）と上五に据えた例もある。

*15 月を見て 連歌例に「まだ夜深きに出づる旅人／河舟の淀まぬ波に月を見て（俊頭）」（菟玖波集・羈旅・一六五七）。

*16 月入りて 連歌例に「雲や霞の光なるらむ／花残る山の梢に月入りて（救済）」（菟玖波集・春下・一二二）。

*17 月更けて 連歌例に「寒くなりぬる庭の秋風／憂き人待つとせし間に月更けて（高秀）」（菟玖波集・恋中・八二三）。

*18 雪降りて 連歌例に「柴の庵の通ひ路もなし／さらぬだに山の深きに雪降りて（行寛）」（菟玖波集・冬・五五八）。

*19 雪を見て 連歌例に「都の遠きほどぞ知らるる／露にこそ濡れし袂に雪を見て」（心敬連歌自註・六〇）があるがごく少ない。

*20 雪待ちて 連歌例に「その音信の聞かまほしきよ／山風の里には降らぬ雪待ちて」（応永年間百韻 山何「ゆきはけふ」・八六／八七）があるがごく少ない。

*21 松の雪 連歌例に「花遅げなる山里の春／これを見よ霞に残る松の雪（良基）」（菟玖波集・春上・五）。

*22 富士の雪 連歌例に「秋こそ今は半ば過ぎぬれ（南阿）／東路の野は夕露の富士の雪（救済）」（紫野千句・第六百韻・六二／六三）。

*23 身を捨てて 連歌例に「朝霜迷ふ松の一群／人をだに留めし人の身を捨てて」（永享年間百韻 山何「おいまつは」万句巻頭・八八／八九）。ただし上五や、短句に詠まれる例も多い。

*24 世を捨てて 連歌例に「つらき気色に見えて別れし／今までに経るをうらみの世を捨てて」（成立不詳宗祇以前 山何「めつらしき」・一六／一七）があるが少なく、詠まれる箇所にもばらつきがある。

*25 人待ちて 連歌例に「なほ身にしめと風は吹くなり／憂き夕べ我にあきなる人待ちて（親尚）」（菟玖波集・恋上・七七九）。

*26 雨降りて 連歌例に「須磨の閑屋は守る人もなし／茅葺きの軒に音せぬ雨降りて（救済）」（菟玖波集・雑二・一二七九）。

*27 これにかけあふべき…とも云ふべきか これらの詞にかけあう上五のことをこそ「玉の冠」と呼ぶべきである。そしてこれらの詞を「錦の袴」ともいふべきであろうか。（嘉村）

《六十一、錦の袴（三）》
冠を着ぬ連歌、

181 風吹かて千代見む花か松の雪
これ、五文字弱し。¹（千代見ん花か）は《松》に引かれても、かやうにあるべし。²（風吹かて）とは時の間などの事にてあるべきに、（千代）に掛け合はぬなり。³されば、強き連歌をば五文字より下まで強く、弱く、やさしき句は上下に交じる詞なく、やさしくあるべし。

⁴一方ばかりを得たるは仕手のうちとは言ひがたし。例へば、同じ矢なれども、犬追物、笠懸の時は慕目を取り出だし、戦場にては征矢こそ射るべけれ。かやうにあればこそ弓矢の徳を顕し侍れ。

⁵強かるべきには強く、弱かるべきには弱く、進むべきには進み、退くべきには退く、体こそ、真の仕手ともいはれべけれ。これらは我と弁へべきものなり。

我と弁へべきものなり。

我と弁へべきものなり。

我と弁へべきものなり。

我と弁へべきものなり。

我と弁へべきものなり。

【注釈】

- *1 冠を着ぬ連歌 (玉の) 冠を被らない連歌。ここでの「冠」とは、「連歌に玉の冠を着せよ」とのいわれを論じた前項《六十、錦の袴(二)》の文脈に即した使い方。

〈181〉

「解説」本句では、しかるべき「袴」を据えながら、それに似合うような「冠」がなかった場合を例示した。前項《六十、錦の袴(二)》では、上五の「玉の冠」と釣り合うように、下五にも「錦の袴」なる歌語を据えるべきものとし、その具体例を示した一覧に、本句の「松の雪」が見える。

「現代語訳」風が吹かなければ千代までも見届けられる花か、松の雪とは。

*2 これ、五文字弱し これ、(上の) 五文字は弱い。つまり一句が頂くべきとした「玉の冠」には、「風吹かで」という歌語がふさわしくない。なお、この文脈で「弱し」とは一句の上手下手を分ける評価用語ではない。下に続く説明にも明らかのように、「強し」と表現したのと対称的な句風を指すのである。

*3 〈千代見ん花か〉は〈松〉に引かれても、かやうにあるべし 「千代見ん花か」とは「松」の語に導かれたとしても、こうなるのがよ

い。「松」に「千代」を詠み合わせた歌例は夥しい数に上る。

*4 〈風吹かで〉とは…掛け合はぬなり 「風吹かで」とは少しの間などの事であろうから、「千代」とは釣り合わないのである。そのように詠むと、《注2》で述べたように、句風が「錦の袴」に部類された「松の雪」と合わないほか、「風吹かで」とは「松」の縁語になる「千代」ともやや矛盾するとの弱点を指摘した。

*5 されば、強き連歌をば…あるべし そうであるから、「強い」連歌を上五文字から下まで強く詠み、「弱くてやさしい」句は、その上下に交じる「強い」言葉もなく、通して「やさしい」のがよい。

*6 一方ばかりを得たるは仕手のうちとは言ひがたし そのどちらかしか心得ていないのは、達者な詠み手のうちとは言いがたい。詠み方における「強」・「弱」のどちらかを優先せず、両者の区別を肝心とする。

*7 例へば、同じ矢なれども…顕し侍れ 例えば、同じ矢でも、犬追物や笠懸の時は幕目鎗矢を取り出し、戦場においては征矢こそを射るのがよい。こう(使い分け)して初めて弓矢の潜在力を存分に発揮できる。犬追物は仕切りの中に放たれた犬を馬上から射当てる騎射練習の一種で、笠懸は遠距離を離れた的(元は射手の笠)を射る馬上の射芸。いずれも的を傷つけないように鏃を除き、高鳴りするこことから幕目(響き目)といった鎗のついた矢を使用した。反対に征矢とは鏃をしつかり嵌めた戦闘目的の矢。底本は「ソヤコソ入」と

あるが、「戦場にて」という文脈から「射」に改めた。「コン」の「コ」字は「カ」に上書きしたと見える。また、底本「アラワシ」の「シ」字にも上書きが認められるが、筆跡からは最終的に「レ」か「シ」かの判別が困難で、「徳を」との組み合わせを重視して他動詞の「顕す」とした。

*8 強かるべきには…いはれべけれ 強くあるべき時は強く、弱くあるべき時は弱くして、進むべき時は進み、退くべき時は退くようにしてこそ、真の上手とまでいわれてもよい。「弱い」のも「強い」のも等しく上手が心得るべき重要な詠風で、混ぜることだけを法度とした。

*9 これらは我と弁へべきものなり こういうのは自分から進んで心得ようとするべきものである。

(ノット)

《六十二、発句大廻し》

一、¹発句、²大廻しと云ふ。^三口伝在り。

182 山はただ^四岩木のしづく春の雨

183 松風は^五常盤の時雨秋の雨

184 五月雨は^六嶺の松風谷の水

^九三體発句、

185 ¹⁰あなたふと¹¹春日のみがく玉津島
¹³これらは切れたる句なり。

186 ¹⁴庭に見て¹⁵尋ねぬ花の盛りかな

187 ¹⁶山近しされども¹⁷遅き時鳥

188 ¹⁸花は今朝雲や霞の山桜

この三句¹⁹切るる詞はあれども切れず。²⁰相構へ相構へ、人のしたる発句を切るるよ、切れぬよ、と云ふこと有るべからず。²¹沙汰一篇に定まるまじきか。²²難ずれば不審を問はれて、²³云はぬも悪し、云ふもまた悪し。心得べきなり。

【注釈】

*1 発句…と云ふ 発句において、大廻しと言われるものがある、という意。

*2 大廻し 上五が下五に掛かる構造の句をいう。例として挙げられている(184)の句は『一紙品定之灌頂』で、「大離れの発句」とされており、中七を脇に置いての掛かり方であることを示唆している。本書《五十六、廻してには》で説かれる「廻してには」が、下五から上五へと語句が掛かる文体を示すのとは相違する。「大廻し」の語は、『連歌手爾葉口伝』の「切字事」に「十八」の切字を挙げた後、「このほかに三切・大廻しなどあれども」とあるのが古い。

また、本書《五十三、挿入部分》の図にも「大廻し」の語が見える。
『梅春抄』で〈184〉〈185〉を「大廻し」の例として挙げ、「大まはし」として、切字ありとするなど、「大廻し」は発句切字論の中で概念化された事柄である。

〈182〉

*3 山はただ…春の雨 山ではただただ春の雨が降っていることだ。

「山はただ」と詠む歌例に、「ひとりのみ我がある床の山はただ塵払ふべき松風もなし」（垂槐集・八五二）がある。

*4 岩木のしづく 岩や木から滴り落ちる雫。歌例に地名を掛けたものであるが、「数ならぬ身にも涙のこぼるるや岩木の山のしづくならん」（新千載集・雑下・二〇二八・安嘉門院四条）がある。

【解説】「山はただ」「春の雨」が降る、と上五から下五に語句が掛かることで、「大廻し」の例としたもの。この掛かり方を考慮すれば、「岩木のしづく」は「春の雨」の雫と取れる。

【現代語訳】山ではただただ岩や木から雫となって滴る春の雨が降ることだ。

〈183〉

*5 松風は…秋の雨 「松風」の音は「秋の雨」の音に聞こえる。

*6 常盤の時雨 松の常緑の葉に降る時雨のごとき、ということ。

【解説】「松風」の音は「秋の雨」の音であった、と上五から下五に語句が掛かることで、「大廻し」の例としたもの。「松風」と「時雨」の降る音の類似は、「松風の音かと聞けば淡路島時雨すぐとて苦たづぬなり」（長方集・一〇八）など多く詠まれる。

【現代語訳】松風の音は、松の常緑の葉に降る時雨の音のようであり、秋の雨の音のようでもある。

〈184〉

*7 五月雨…谷の水 「五月雨」の音は「谷の水」の音のように聞こえる。

*8 嶺の松風 「嶺」に生える「松」に吹く「風」の音のごとき、ということ。

【解説】「五月雨」の音は「谷の水」の音であった、と上五から下五に語句が掛かることで、「大廻し」の例としたもの。『密伝抄』に「五月雨は谷の水音松の風」の形で見えることから、「音」についての類似を叙述しているとみなしてよいのであろう。また、『ささめごと』には「興、たとへ歌の心」とあり、「嶺の松風」「谷の水」が譬えであることを示す。《注2》に指摘したように、この発句は、『一紙品定之灌頂』で「大離れの発句」とするが、『宗養三卷集』では「三段切の事」に挙げられている。『連歌秘袖抄』でも「三段切の事、三名切とも云ふなり」の項にこの句を挙げ、「嶺、谷、五

月雨と、以上三つ有るゆるゑ三段の切字と云ふなり」と説明し、こゝでの「大廻し」の概念と相違する。

『現代語訳』五月雨の音は嶺の松に吹く風のようにもあり、谷川を流れる水の音のようでもある。

『備考』『密伝抄』に「侍公発句、西山の谷にて」と詞書がある。『梵灯庵主返答書』その他でも救済の句とされているが、『梅春抄』では周阿とある。

*9 三体発句 五七五の三つに叙述が分割されていることをいうか。

本書《五十三、挿入部分》の図にも「三体」の語が見えるが、説明がなく詳細不明。なお、『宗義三卷集』『連歌秘袖抄』には「三段切」「三字切」の法が取り上げられており、それらの概念と重なる点もあるが、完全に一致するとは言えない。なお、「三体」の分類は見えない。

〈185〉

*10 あなたふと ああ尊いことだ。感動詞「あな」と形容詞「尊し」

の語幹が接続したもの。「ふと」は底本「トウ」に上書き。

*11 春日のみがく 春の日によって磨かれ、ますます光が増す、ということ。下五の「玉津島」との関わりでは、春日社が意識されているか。

*12 玉津島 紀伊国の歌枕。和歌の浦の島。玉津島神社があり、和歌神である衣通姫が併祀された。ただし、『備考』に示した『密伝抄』によれば、ここでは俊成が邸内に勧請した新玉津島神社をいう。

『解説』五七五それぞれが独立した叙述とみなして「三体発句」の例としたか。『宗義三卷集』『連歌秘袖抄』などでは「大廻し」の例としている。前述したように、それらの書では〈184〉を「三段切」としていること、『一紙品定之灌頂』では〈184〉とともに、当該句も「大離れの発句」としていることなどを考え合わせると、認識に混乱があるとも思われる。ただし、『連歌奥儀明鏡秘集』では「大廻し発句」とし、「この句、切字、首尾にて切れ候。あなたふと」と置き、下に玉津島と置く」と説明しており、本書での「大廻し」の概念と一致する。

『現代語訳』ああなたと尊いことだ。春の日の光によつてますます磨かれる玉のような玉津島であることだ。

『備考』『密伝抄』に「五条玉津島にて、周阿」と詞書がある。『梵灯庵主返答書』その他でも周阿の句とされている。

*13 これらは切れたる句なり 「これら」は〈182〉から〈185〉の四句すべてを指す。この四句は一句としてきちんと独立した形の句であることをいう。

〈186〉

*14 庭に見て 花の盛りを庭で見ただけで、ということ。

*15 尋ねぬ花の盛りかな 尋ねて行くことのない花の盛りであることだ。庭以外の所の花盛りの桜はわざわざ尋ねて行かない、という意。

〔解説〕庭以外にはわざわざ花盛りの桜を見に行くこともない、庭の桜だけで満足するということであろう。「かな」という切字があるが、切れていないとみなした例。

〔現代語訳〕庭で見ただけで満足し、よその花の盛りをわざわざ尋ねて行かないことだ。

〈187〉

*16 山近し…時鳥 「時鳥」は初夏に山から里へと降りてきて鳴く、とされる。そのような山の近くににいるのに、ということ。

*17 遅き時鳥 やって来て鳴くのが遅い時鳥であることだ。

〔解説〕「山近く家あしせれば郭公鳴く初声を我のみぞ聞く」（金槐集・一四三）などと詠まれるように、山に近い所にいれば、いち早く「時鳥」の声を聞くことができるはずであることを踏まえての句。「遅き」はやって来て鳴くのが遅い、ということ。「し」という切字があるが、切れていないとみなした例。

〔現代語訳〕山から近いところにいる。それなのに、自分の所にやってくるのが遅い時鳥であることだ。

〈188〉

*18 花は今朝雲や霞の 花は今朝、雲や霞に紛れている。「雲」や「霞」に紛れて花だか雲か霞か判然としないと詠む歌例に、「雲や立つ霞や紛ふ山桜花よりほかも花と見ゆらむ」（新勅撰集・春上・七一・俊成）がある。

〔解説〕昨日ははっきり見えていた桜の花が、今朝見ると、「雲」や「霞」に紛れて、花なのかどうか判然としない、という景を詠む。もしくは、実際の花は散って「花」のように見えるのは「雲や霞」であるということか。下五の「山桜」は、そのような花を付ける山桜であるということ。「や」を切字と誤解し、切れているとしているようだが、そのようなものでは切れていないとした例。

〔現代語訳〕山桜の花は今朝、雲や霞に紛れてしまったことだ。

*19 切るる詞はあれども切れず 切ることできる詞はあるものの、句が切れていない。「切るる詞」は切字をいい、ここでは〈186〉の「かな」、〈187〉の「し」、〈188〉の「や」を指す。典型的切字である「かな」についても、『密伝抄』では、「梅も咲き柳もまゆをひらかかな」を「かなと云ひ候ひて、切れ候はぬ句」としている。逆に『連歌教訓』では〈184〉を「面に見えぬ切字」の例とし、『連歌秘袖抄』では〈185〉の句について、「この切字、心にて切る発句なり」

と説明する。発句が切れているかいけないかは、単に切字の有無で決まるものではないことは、さまざまな論書で示唆されている。

*20 相構へ相構へ：有るべからず 注意に注意を重ね、安易に人の詠んだ発句について、切れているよ、切れていないよ、と言つてはならない。「相構ふ」は気を配る、注意する、の意。

*21 沙汰一篇に定まるまじきか 判断は一通りに決まっているものであるうか。そうではないだろう。「一篇」は「一篇」で、一方的に偏るの意。「定まるまじき」は底本「サタマルシキ」。意により「ま」を補った。

*22 難ずれば不審を問はれて 切れていないと非難すれば、どうしてそのように判断するのか、つまびらかにするように尋ねられて。「不審」は「不重」にも読めるが、意により「不審」とした。

*23 言はぬも悪し、云ふもまた悪し 理由を言うのも具合が悪いし、言わないのも具合が悪い。切れている、切れていないと判断した場合、その理由が明確にできないので、ということ。（廣木）

《六十三、脇句・第三》

一三、¹脇句は発句の懷^{ふとし}を出でよと云へば、^其その時節の物を以て付くべきなり。²詞確かに、浮きたる様のてにはなどすべからず。³法楽など、年始の連歌の時、「哉」とある発句に脇に「し」と留めず。

「かなし」と続く故なり。⁴この体の句、面には用心有るべきなり。⁵第三も脇の句ほどはなくとも、これも発句に遠からぬ時節をするべし。⁶発句、真名字留め^{まなな}の時は、第三、真名字留め^{まなな}はかしましきなり。仕手心なり。⁷昔は真名字も「て」「らん」のやうに嫌はれしなり。

【注釈】

*1 脇句は発句の懷を：付くべきなり 「脇句は発句の懷を出なさい」と言うのは、発句と同じ時節の事物を詠み込んで句を付けるのが良いということである。脇句については、『僻連抄』に「時分・景物は発句に同じ」とある。

*2 詞確かに、浮きたる様のてにはなどすべからず 脇句は詞を的確に用いて詠み、うわつた不確かな使い方のてには等は詠んではない。『筑波問答』で「ただの連歌にも、一の懷紙の面のほどは、しとやかの連歌をすべし。てにはも浮きたるやうなることをばせぬことなり」と、脇句だけではなく初折りの表全体についてであるが、同じく浮わつたてにはを戒めている。

*3 法楽など：続く故なり 法楽などや年始の連歌の時に、句末に「哉」とある発句に対して、脇句の句末には「し」と留めないものだ。句末を繋げると「かなし（悲し）」と続かためである。法楽や年始の連歌のように祝言性を求められる場では、句の内容だけではなく、発句と脇句の隣り合う句末の言葉の並びのような点でも、め

でたさを損なわないように配慮が求められるということ。底本では「哉」「し」の前にそれぞれ「へ」を付してあるが、本文では省略した。

*4この体の句、面には用心有るべきなり このような句は、初折の面では用心すべきである。発句と脇だけではなく表八句でこの《注3》のような配慮が必要だということ。

*5第三も脇の句ほどは…するべし 第三句も、脇句ほどではないが、発句の時節と遠くない時節を詠むのが良い。

*6発句、真名字留めの…仕手心なり 発句が体言止めの時は、第三句を同じ体言止めにするのは目障りである。そこに配慮するのが連歌の達人の心がけである。

*7昔は真名字も「て」「らん」のやうに嫌はれしなり 昔は体言止めも「て」や「らん」のように第三句では避けるべきとされたものだ。第三句に体言止めや「て」「らん」留めを嫌うという記述は他に見えない。特に、て留めは『一紙品定之灌頂』の「第三の事」の項に「ただ、てにはをいつよりも、て、と留むべし」とあるように第三句で推奨される。底本では「て」「らん」の前にそれぞれ「へ」を付してあるが、本文では省略した。

(浅井)

《六十四、発句の祝言》

一、^四発句の祝言に「上なき花」「上もなし」などあること、常の習^ハひなり。然りと雖も、^下として上なき」などと云へば、い^ハかがあるべきか。心得^ハべきことなり。中々、祝言の句に誤^{アヤ}りあるなり。また、^又かやうのことを^又懣^{ウレシ}ひに片聞^ハきして答^{コタ}無^クきに答^{コタ}を作る^スこと、かへりて比興^{ヒキョウ}の至^タりなり。

【注釈】

*1発句の祝言に「上なき花」…誤りあるなり 発句での祝言の言葉として「この上ない花」「この上もない」などと詠むのは、常のことである。そうはいっても、「下として、その上はない」などと言うのはどうであらうか。気をつけるべきだ。簡単そうに見えてかえって、祝言の句には誤りがあるものだ。発句を詠む際に、祝言を気にして行き過ぎることのないようにすべきだということ。「上なし」の発句の例に「月今宵上なき玉の光かな」(東山千句・第五百韻・一・肖柏)等がある。底本、「上なき花」の「上」の右傍に「ウへ」とふりがなあり。

*2かやうのこと…至りなり このようなことを中途半端に聞きかじって、答が無いのに答を作るのは、かえって不合理の極みである。祝言の句等について、半端な理解で誤りではないものを咎めるようなことのないように戒めている。

(浅井)

《六十五、詩歌を寄合に取る事》

一十、¹詩歌を寄合に取る事。²先達のし馴らさぬことをば斟酌せよと云ふこと、別の子細無し。詩歌は寄合に取り様あり。初心にては取り誤ることもあるべきによりて、先達の句に任せよとなり。³古事機縁の寄合なども、珍しく我と見出して付けたるこそ一入面白かるべけれ。

詩歌を寄合に取る様。

189 氣⁴霽⁵れては風⁶新⁷柳⁸の髪⁹を梳¹⁰る
氷¹¹消¹²えては浪¹³旧¹⁴苔¹⁵の鬚¹⁶を洗¹⁷ふ

⁴⁵この詩を取るには「柳」に「髪」を付け、「苔」に「鬚」を付くべきに、詩一つの内なればと云ひて、「柳」に「鬚」を付け、「苔」に「髪」を付けては良かるべきか。⁴⁶「鬚」に「髪」を付けんことは子細無し。人体の内なるが故に。

歌を取る様、これまた詩にかはらず。

190 白雲に「羽打ちかはし飛ぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月

⁴⁸「雁」には「数」を寄合に取れり。詩歌に必ず体の詞・用の詞とてあり。これは「雁」を体として「数」の「見ゆる」を詮に詠みたる歌なるが故に「数」を取るべし。

ある連歌に、
191 ふる年の内より春の日数にてと云ふに、

192 雲とや言はん山の初雪

と付けたり。この本歌に云はく、

193 年の内に春は来にけり一年を去年とや言はん今年とや言はん
⁴⁹この歌「去年とや言はん今年とや言はん」を詮に詠みたる故に、寄合に「言はん」を取るなり。これらにて了簡あるべし。

【注釈】

*1詩歌を寄合に取る事 漢詩・和歌を寄合として取る事については、『九州問答』に「本歌同類の事」「詩の心を取る事」、「擊蒙抄」に「本文」、「楚灯庵主返答書」に「本歌の詞」、「長短抄」に「本歌取り」等として言及がある。

*2先達のし馴らさぬ…子細無し 先達が通常使わないことをよく理解して注意しなさいということで、それ以外に言うべきことはない。
「斟酌」は先方の事情をよくくみ取り推察すること。

*3古事機縁の寄合…面白かるべけれ 故事に関わる寄合などで、余使われていないものを自ら発見して付けることは、とりわけ面白いに違いない。底本「キエン」の「エ」の字にあたる箇所が虫損、文脈により補った。『日葡辞書』に「Qian キエン（機縁 友情の結びつき、あるいは、つながり）」とある。

*4 気霽れ 天氣が晴れていること。「気」は天候。「霽れ」は「晴れ」をいう。

〔現代語訳〕 空が晴れて、萌え出でた柳を風が吹く様は、髪を梳かすかのよう。水が溶けて雪解け水の波が古い苔に寄せ来る様は、鬚を洗うかのよう。

〔備考〕『和漢朗詠集』一二。作者未詳。『江談抄』などに載る。

*5 この詩を取るには〈柳〉に：良かるべきか この詩を寄合として用いる場合、「柳」に「髪」を付け、「苔」に「鬚」を付けるのが妥当であるのに、一首の漢詩の内にある詞だからといって「柳」に「鬚」を、「苔」に「髪」を付けることは適切ではない。一句の中の比喻表現であるから寄合になるのであって、同一の一首の中にあるからといって付合に用いることは適切ではないということ。『連珠合璧集』『髪トアラバ柳』『竹馬抄』『髪、付合ニハ：柳の緑』とある。鬚、苔については寄合書に記述がない。

*6 〈鬚〉に〈髪〉を付けんことは子細無し。人体の内なるが故に「髪」に「鬚」を付けることは、共に人体のなかの一部分であるから別の句であるからといって問題ではない。

〈190〉

*7 羽打ちかはし 羽が重なるかのように羽ばたき飛んでいく様。

〔現代語訳〕 白雲に羽ばたき飛んでいく雁の数さえ見て取ることができる、明るい秋の夜の月であることだ。

〔備考〕古今集・秋上・一九一・よみ人しらず。

*8 〈雁〉には〈数〉を：取るべし 「雁」には「数」を寄合として取る。詩歌には必ず体の詞・用の詞というものがある。この和歌では「雁」が体の詞であり、そのありようとして肝心なところを「数」が「見ゆる」こととして詠んでいるので、「数」を寄合として取るべきである。「体用」はものの本体とその作用。「詮」は最も重要なところ、肝心なところ。

〈191・192〉

*9 ふる年 「ふる年」は旧年をさすが、付合において「ふる」は雪が「降る」の掛詞となる。

〔付合〕 過ぎ去った旧年の内に立春が来て、という句に、春であるならば山に白く降る雪を雲と言おうか、とした付合。旧年中に春が来るといふ和歌に〈193〉があり、それによって「言はん」を付けたもの。『長短抄』注釈Ⅲ《五十一、てには付（三）》で「懸けてには」とされる付合技法が用いられている。

〔現代語訳〕《前句》 過ぎ去った旧年のうちに春の日数は過ぎてしまつて。《付句》 旧年中に春が来てしまつたので、山に積もつた初

雪を白雲と言おうか。

〈193〉

〔現代語訳〕旧年のうちに立春が来てしまった。この立春が来てしまった旧年のことを、去年と言おうか、今年と言おうか。

〔備考〕古今集・春上・一・元方。詞書「ふる年に春たちける日よめる」。

*10 この歌へ去年とや…を取るなり この和歌は「去年とや言はん今年とや言はん」を肝要として詠んでいるので、先の連歌では前句の「年の内」に「春」という寄合に「言はん」を取るのである。

（嘉村）

《六十六、仕手の好まぬ詞》

一六、仕手の好まざる詞、別紙にこれを記す。¹⁶ かの詞も五句三句、救済・周阿の取り廻さぬはなし。¹⁷ 一向にあるまじき詞ならば、ありともなしとも云ふに及ばず。¹⁸ 仕立て、大事なり。或るは疎み、或るは理叶はず。仍つて、その一かかりに嫌ふ詞あるべし。

¹⁹ 「月の雨」「花の風」「萩の風」などは、さして聞きにくき所なし。しかあれども、よろしからぬ詞なり。

「月の雨」とは、何とあるを云ふべきか。月より降る雨もなし。

²⁰ かき暗し降る雨の夜にては月の由来も知らぬに、「月の雨」とは云ひがたし。²¹ 月見えて降る雨ならば、月の曇るにてこそあるべけれ。²² 更に月の見えぬ様に仕立てては、月の肝なく、あまりに無下なり。仍つて仕手の、この類の詞を嫌ふなり。

²³ 「花の風」は、ざざめきたる詞なれども、これまた仕立て大事なり。いかやうなる時吹くを「花風」と云ふべきか。²⁴ 盛りには、さすが風なき心地を含めり。散るべき比の風ならば、夢よりも徒なる花に時の間も吹きそふべき風ならぬを、「松風」のごとく「花の風」と云はんこと、理更々叶はず。²⁵ ただ花を吹き散らしたるばかりのためならば、これまたあまり無下なり。²⁶ 花を散らす風の詮ばかりを云ひたてては何の面白きことかあらん。されば、「風よりつらき筆の跡かな」と詠めり。²⁷ これも「風よりつらき仕手心かな」とこそ云ふべけれ。

²⁸ 「萩の風」は疎みたり。²⁹ 「水音」はよく聞こえたり。「水の音」は、間遠に聞こゆ。³⁰ 「波音」、疎みたるやうなり。「波の音」は然り。³¹ 「水の音」「波音」あるまじきにてはなし。³² 詞の善し悪しきを我と弁へ、いかにもいかににも詞を 勞るべし。

【注釈】

*1 仕手の好まざる詞、別紙にこれを記す 連歌に手馴れた者が好ま

ない言葉を、別紙に書き記した。「好まざる詞」は、連歌では好んで用いなかった言葉のこと。「嫌詞」とも呼ばれ、『一紙品定之灌頂』には「連歌にすまじき詞」、『和歌集心鉢抄抽肝要』には「悪詞不為事」として具体例が載るが、本書の挙げるものとは重ならない。「別紙」の内容は未詳。本書とは別に、語の一覧が作成されていたと考えられる。

*2かの詞も五句三句、救済・周阿の取り廻さぬはなし そうした（連歌に手馴れた者が好まない）言葉であっても、あちらに五句こちらに三句というように散見し、救済・周阿が巧く処理しなかったものはない（どれも巧く処理している）。「五句三句」は「三五」の倒語の一種か。「三五」は散らばっているさま。「取り廻す」は、物事を巧く処理すること。救済・周阿は南北朝期の連歌師で、本書で度々言及される。『長短抄』注釈Ⅱ『三十、十の風体（三）』、『長短抄』注釈Ⅲ『四十七、きう題（二）』参照。

*3一向にあるまじき詞ならば、ありともなしとも云ふに及ばず 全くあつてはならない言葉ならば、ありなしを議論するまでもない。

*4仕立て、大事なり…あるべし （連歌に手馴れた者が好まない言葉を使うときは）仕立てが困難である。あるいは縮こまって聞こえ、あるいは理屈が通らないこともある。故に、そうした一連の言葉につきにおいて避ける言葉があるだろう。

*5「月の雨」…よろしからぬ詞なり 「月の雨」「花の風」「萩の風」

などには、それほど聞き苦しい所はない。しかしながら、（連歌には）ふさわしくない言葉である。（『古典文庫』及び『俳書叢刊』では「萩の風」であるが、運筆から考えると「萩の風」と読める。「月」と「雨」、「花」と「風」、「萩」と「風」を組み合わせた歌例は多いが、「月の雨」「花の風」の歌例はきわめて稀である。「萩の風」の用例は多少見えるものの、広く定着した表現とは言いがたい。「君もまたタベやわきて眺むらん忘れず払ふ萩の風かな」（六百番歌合・八二五・良経）が初例で、判詞には「左歌、タベやわきてなどは宜しく侍るを、萩の風かなや、少ししかにぞ聞こえ侍らん」とある。ただし、いずれの措辞も連歌例は存在する。

*6かき暗し降る雨の…云ひがたし 辺りを暗くして降る雨の夜では、月の在り処も定かでないのに、それを「月の雨」と言い表すのは無理がある。

*7月見えて降る雨ならば、月の曇るにてこそあるべけれど 月が見えている状況で降る雨ならば、月はぼんやりと曇っているはずだ。

*8更に月の見えぬ様に…嫌ふなり その上、月が見えない様に句を仕立てたのでは、月の本意がなく、あまりに酷い。そのために、連歌に手馴れた者はこうした類の言葉を避けるのである。「月の雨」は、理屈が通りにくく、理屈を通そうとすると景物の本意を損う表現といえる。連歌例はごく少数であるが、同時期の連歌論書と目される『連通抄』に、発句例のひとつとして「出づる方は麓も晴れよ

月の雨」とある。

*9 「花の風」は…大事なり 「花の風」は、一見して派手に飾り立てられた言葉だが、これもまた仕立てが困難である。「さざめく」

は、詩歌などでは、心を重んじないで、ただ言葉が華やいでいるさまをいい、良基の連歌論でも用いられている。『九州問答』注釈Ⅰ

《八、詩ノ心ヲ取事》《十五、真実秀逸体事》参照。中世後期から「さざめく」の形も使用されたとみられる。『饅頭屋本節用集』は

「ザゞメク」、『黒本本節用集』は「サゞメク」とする。底本には「サゞ」とあり、書写者は「さざめく」と音読したことが知られる。

*10 いかやうなる時吹くを「花風」と云ふべきか どのようなときに吹くのを「花の風」と言い表わすのがよいだろうか。

*11 盛りには、さすが風なき心地を含めり 花の「盛り」と詠むときには、やはり風の吹かない様相を帯びさせるものである。「花盛り

梢をさそふ風なくてのどかに散らす春に逢はばや」（山家集・一三五）で望まれているように、風に散らされることがないのが、花盛りの本意だということ。

*12 散るべき比の風ならば…理更々叶はず 花が散ろうとする頃に吹くならば、それでも、夢よりも儚くもろい花に、ほんの少しの間も

吹いてほしくない風なのに、吹き続ける「松風」をいうように「花の風」と言い表そうとするのは、理屈が全く通らない。「松風」は

その音に寂寥感を響かせる表現であり、「夕暮の鐘の響きに吹きそ

へて風の山を送る松風」（壬二集・一六三一）などと詠まれる。「花の風」という形の歌例は管見に入らない。しかしながら、連歌例は少なくなく、用例に「花の風吹くなとかかれ松の藤」（梵灯庵日発句（吉川本）・八八）などがある。

*13 ただ花を吹き散らし…無下なり 単に花を吹き散らしていることを詠むためにのみ「花の風」と言い表すならば、これもまたあまりに酷い。

*14 花を散らす風…面白きことかあらん 花を散らす風という眼目のみを強く主張しては、いったい何の趣があるうか。

*15 されば、「風よりつらき筆の跡かな」と詠めり それで、「風よりつらき筆の跡かな」と詠むのである。出典未詳。花を散らす風はつ

らいものだが、その風よりもつらい冷淡な内容の恋文だ、という意。「風よりつらき」の歌例に、「花の香は薫るばかりを行方とて風よりつらき夕闇の空」（拾遺愚草・六二七）がある。

*16 これも「風よりつらき仕手心かな」とこそ云ふべけれ これも、「風よりつらき仕手心かな」と言い表せよう。花に吹く風を詠む連

歌の作り手は、その風よりもつらいものだ、と揶揄した言い方。

*17 「萩の風」は疎みたり 「萩の風」は縮こまっている。「萩吹く風」という和歌に頻出する措辞を圧縮したような言い方だとい

う。連歌例は「秋よりは涼しきに吹け萩の風」（梵灯庵日発句（吉川本）・一五六）、「吹きさくや音ぞ穂よりある萩の風」（連通抄）

など多数見える。本書は「荻の風」を「好まざる詞」とするが、『和歌集心浬抄抽肝要』『禁好詞』は好むべき詞としている。このように認識が改まり、積極的に用いられるようになったか。

*18 「水音」はよく聞こえたり。「水の音」は、間遠に聞こゆ 「水音」はよく聞こえる。「水の音」は、間延びして聞こえる。「水音」

は和歌・連歌ともに用例多数で、和歌の初例は「せく手には涼しきことも淀みけり水音のみも思ひけるかな」（散木奇歌集・三三二）、連歌の初例は「水音の響くそなたに滝落ちて」（元弘三年十月二十三日百韻・一九・印）である。「水の音」は、和歌では「五月雨は懐かしかりし水の音のおびたしくも鳴りわたるかな」（散木奇歌集・二九六）などのように字余りで用いるのが普通である。連歌例に「氷らむとここに寒きは水の音」（梵灯庵日発句（吉川本）・二九一）など。ただし、後代の連歌書『砌塵抄』『禁好詞』『吾妻問答』は「水音」を嫌うべき詞とする。

*19 「波音」、疎みたるやうなり。「波の音」は然り 「波音」は縮こまった感じだ。「波の音」はその通りでよい。和歌では、「波音」の形はきわめて稀であるが、「波の音」は「浦づたふ磯の苦屋の梶枕聞きもならはぬ波の音かな」（千載集・羈旅・五一五・俊成）など多く詠まれる。連歌例も同様の状況である。

*20 「水の音」「波音」あるまじきにてはなし 「水の音」「波音」も、あつてはならないわけではない。

*21 詞の善し悪しきを我と弁へ、いかにもいかにも詞を誇るべし 言葉の善し悪しをおのずから弁えて、ぜひとも言葉を大切に扱うべきである。底本「イタワタルヘシ」とあるのは誤写か。「誇る」と解した。（生田）

《六十七、返歌の体（一）》

一七、¹歌の返事するべきやう、四種あり。連歌には、返歌の体なし。さりながら会釈の句の付合は返歌の心あるべし。

²連歌には、二種あり。我より勝れる人に初めて見参の時の発句申すことあらば、その心ちとあるべし。³また、上の人の御発句に脇の句など付け申すことあらん時は、その小宛⁴これまたあるべし。

⁴同じほどの人に対しての句、その変⁵目あるべし。連歌にはこの二体なり。

⁵発句ならず仕流しの句にもこの心あり。また云ふ、かやうの句にこそ愁⁶じひに誤り多⁷ければ、ただ心に祝言をもつて差し出⁸びたる詞を斟酌する体もあり。

⁶これはまた貴所にての発句、先年、武州、年始の御会の時不吉の句出で来しによつて、花洛の連歌押し止められき。⁷仍つてさりぬべき方様の御夢想などにもしかるべからざる由あり。⁸仙洞の御

夢にも、洛中の上下・万民の舌を武州の切らると御覽ぜらるるによつて、次の年の正月、武州の御宿所において御会あり。発句、救済、

194 春の来てもとの道ある雪間かな

*10 脇句、頼之、

195 また改まる年ぞ久しき

*11 この発句、心妙にして連歌を起さるる儀を顕し、有道の祝言なり。殊勝の句なり。脇の句もこの心に掛け合ひたり。

*12 また云ふ、御前の発句に、周阿、

196 花咲きて御代に 樽の盛りかな

*13 脇の句、上意を以て、頼之、

197 常葉の陰ぞ夏木立ちなる

【注釈】

*1歌の返事するべきやう…心あるべし 和歌における返事の詠み方は四種ある。連歌には返歌をするやり方自体はない。しかしながら会釈の句に対する付合には、返歌をしているような意識があるべきである。

*2連歌には、二種あり…ちとあるべし 連歌には、(こ)ういふ返歌に

似た詠み方は二種ある。自分より目上の人のところに初めて伺ったときに発句を詠むことがもしあれば、返歌をしているような心構えが少しあるべきである。つまり、返しとなりえない発句ではあるが、目上の人の御前での場合、その立場に応じて、返歌をする時と似た気持ちをもって詠むべきとする。

*3また、上の人の御発句…あるべし また、目上の人の発句に脇の句を付けることがあったら、発句の肝心なところにしつかりつけていないといけない。「小苑」について『長短抄』注釈Ⅲ「四十六、きう題(一)」参照。

*4同じほどの人に…二体なり 自分と対等な相手に対して付けたのと、目上の人に対して付けた句には、それなりの違いがなければならない。連歌における返歌のようなやり方はこの二種である。《注2》にいう返歌風な発句の詠み方がその第一種で、第二種は《注3》に説く、目上の人の発句に付けた脇句の場合、的確に呼応すべく特別に工夫を凝らした詠み方を指す。

*5発句ならず仕流の…体もあり 発句に限らず、一座の成り行きで付けた句でも、こういう意識を持つときがある。加えていうならば、このような場合の句に限って間違いが多くなりがちなので、もっぱら祝う気持ちをもって出過ぎたような言葉を控えるといったやり方もある。

***6 これまた貴所にての：止められき** 貴人御前での発句の場合も同じであるが、先年、武州が、新年の御連歌会の際に不吉な句が出てきたことにより、都の連歌を中止にしたことがある。「武州」、つまり武蔵守の職にあった細川頼之（一三二九―九二）なる人物は、三代将軍足利義満（一三五八―一四〇八、在任一三六八―九四）をその就任前年から十二年に亘り（一三六七―七九）、幕府管領として補佐した。武蔵守に任命されたのが義満将軍就任当年（一三六八）。ここで「御会」とされる連歌会の主催者については詳らかでない。以下に「武州の御宿所」の用例もあり頼之本人の可能性を排除し切れないが、当会の事情が都全体に響いたことを合わせて考えると、やはり公的性格を持つ將軍義満の会が妥当。尤もこの文脈で頼之の連歌中止事件が取り上げられたのは、（その対応が極端すぎたにせよ）貴人の前で場に相応しくないような句を詠まないことがいかに重要かを示すためと思われる。なお、頼之は勅撰集に計十三首ほど入集し、歌人今川了俊を自邸に招き連歌を張行するなどして、文芸にも深い志を有した。

***7 仍つてさりぬべき…由あり** したがって相当な身分の方の御夢想にも、そのような（つまり貴人を前にした時ふさわしくないような）句があつてはならないという趣旨の教示があつた。本文章の指す事情はやはりはっきりしないが、中止事件の顛末を追つての文脈にしてみれば、ここの「さりぬべき方様」とは「御会」主催者と同じく

義満に特定できるか。そうであれば補佐官頼之の強硬手段を將軍自らが認めたことになる。文脈が通りにくいのが、武州が連歌を禁止したことを、あつてはならないとした、とも取れる。

***8 仙洞の御夢にも：御会あり** 上皇の夢にも、（管領）武蔵守頼之が都中の住民全員の舌を切るというのをご覧になったが、その翌年の正月には同武蔵守頼之の屋敷で連歌会が催された。ここに挙がる関連人物の呼称により時期を限定してみれば、当の連歌会に参加した救済の没年（一三七八）以前、頼之の武蔵守就任年（一三六八）以降で、「仙洞」は、この時期に限定すれば、頼之が在位年間からも擁護した御光厳上皇（一三七一讓位、一三七四崩御）とみてよいだろう。ここの文意は特に前文との関係において解釈が難しい箇所。「さりぬべき方様の御夢想にも」「仙洞の御夢にも」との連続を重視すれば、將軍に次いで上皇までも連歌の中止に一端同意をしたとみえる。一方、前注の別解と同様、夢の中身が、都民の舌を切る、つまり連歌を詠むことを禁止したことに対する痛烈な批判を含意しているとも読める。そうであれば夢が連歌再開につながったことになる次の付合を引き出していると取れる。

***9 発句、救済** 救済については《六十六、仕手の好まぬ詞》参照。本書に度々言及され、引用される南北朝時代に活躍した連歌師。

***10 脇句、頼之** 亭主として頼之が脇句を付ける。細川頼之については《注6》参照。

〈194・195〉

「付合」「雪間」が解氷して見え出したころの「春」に「改まる年」を合わせた素直な付合で、このありふれた趣向に「有道の祝言」、つまり連歌再興の祝意を託した。前句の「道」とは去年の不吉な出来事（《注6》《注8》参照）の影響で一時期中止となつて「埋もれて」いた連歌の「道」を指し、春と共にそれが復活したことを言つた。付句はその志を共有して歓迎する。

「現代語訳」《前句》春が来てもとの道がほの見える雪間だな。《付句》新たな年もまた久しく続くものである。

*11 この発句：殊勝の句なり。脇の句もこの心に掛け合ひたり この発句は、一句としての趣向も優れ、また連歌の再興を果たした旨を表現して、道に適つた祝言となつてゐる。素晴らしい句である。脇句もその趣旨にうまく応じてゐる。

*12 また云ふ、御前の発句に、周阿 同様に、（足利義満）御前での発句に、周阿がこう詠んだ。周阿は《注9》に見える連歌師救済の弟子。同じく《六十六》、仕手の好まぬ詞《参照》。「御前」とは頼之が補佐した將軍足利義満。《注6》参照。

*13 脇の句、上意を以て、頼之 その脇句に、將軍義満の意を汲んで、頼之がこう応じた。

〈196・197〉

「付合」夏に花を付ける「樗」に「夏木立」で応じる点等から、正月に詠まれた（194・195）の連歌と時期を異にすると思われるが未詳。満開の樗と夏頃の緑林を合わせた歌例に「樗咲く外面の木陰露落ちて五月雨晴るる風渡るなり」（新古今集・夏・二三四・忠良）などがある。一時だけの花に常緑を対照しながら、両者共通に漲る生命力を際立たせ、当代の盛んな様を寿ぐ付合。発句の賞賛する意図をうまく「返した」、著者のいう返歌的に詠む脇句の一例。

「現代語訳」《前句》花が御代に巡り合つて咲き、樗の木は盛りのころになつたことだ。《付句》一方で常葉の木陰も繁つた夏木立ちで覆われている。

（ノット）

《六十八、返歌の体（二）》

また云ふ、周阿^又洛中^{洛中}に於いて知音の聖あり。^中竹生島にある坊を請け取りてある由、聞きて尋ね行きて、周阿発句、

198 ³見てもみむ^み月を主^{あるじ}の花の宿

脇句、この聖、

199 軒端の梅を風や訪^とふらん

と付けた。これ、よろしからぬ付様なり。^也周阿をば（風）になして、我をば（梅）に喩^{たと}ふるやうに聞こえたり。自^じ称^{じしょう}の句か。

【注釈】

*1 洛中に於いて知音の聖あり 都に知人の聖がいる。「洛中」は都の意。「知音」は心の底をうちあけて話すことのできる友。転じて、友人、知り合いのこと。

*2 竹生島にある坊を請け取りてある由、聞きて (聖が) 竹生島にある僧坊を引き受けていることを聞いて。「竹生島」は現在、滋賀県琵琶湖の北部にある島。竹生島観音として知られる宝厳寺がある。「坊」は僧侶の居所。

〈198・199〉

*3 見てもみむ 見てみたいものだ。

*4 月を主の花の宿 月を主人とする花咲く宿。「月」を「主」とするというのは、月が宿の主人である意。歌例に、「風吹く深山の庵のひまをあらみ月を主と訪ふ人もがな」(範宗集・二三七)がある。

「花の宿」というのは、花の咲きほこる家のこと。歌例には「夢なれや昔の春の花の宿野原の露に秋風ぞ吹く」(安撰集・一八八・興雅)などがある。

「付合」月を主人とする花の咲く宿を詠む前句を受けて、付句はその花を梅の花と取って、その軒端の梅に風が訪れているのであろうか、と応じたもの。

【現代語訳】《前句》見てみたいものだ、月を主人とする花咲く宿を。《付句》その野端に咲く梅を風が訪れているのだろうか。

*5 これ、よろしからぬ付様なり これは(連歌に)ふさわしくない付け方である。

*6 周阿をば(風)になして、我をば(梅)に喩ふるやうに聞こえたり 周阿を「風」に、聖自らを「梅」に例えているように聞こえる。

*7 自称の句か 自らを称讃した句であろうか。なお、仮名使いについて、底本「ジセウ」と濁点あり。『易林本節用集』には「自称^{ジセウ}」とある。客人である周阿を「風」に例えながら、聖自らを一般に称美される「梅」に例えるのは礼儀を欠いた詠み方であるということ。

(新田)

【引用・参考文献】

〈引用文献〉

※引用和歌の歌番号と本文は、特に断りのない限り『新編国歌大観』(古典ライブラリー)に拠り、引用連歌句の句番号と本文は、特に断りのない限り『連歌大観』(古典ライブラリー)に拠った。

○『毎月抄』…『歌論集』(新編日本古典文学全集)

○『袋草紙』…『袋草紙』(新日本古典文学大系)

- 『十訓抄』…『十訓抄』(新編日本古典文学全集)
- 『枕草子』…『枕草子』(新編日本古典文学全集)
- 『知連抄』…廣木一人他『知連抄』注釈Ⅰ～Ⅳ
- 『僻連抄』…『連歌論集 能楽論集 俳論集』(日本古典文学全集)
- 『擊蒙抄』…廣木一人他『擊蒙抄』注釈Ⅰ～Ⅲ
- 『筑波問答』…『連歌論集 能楽論集 俳論集』(新編日本古典文学全集)
- 『連歌秘伝抄』…『連歌論集 二』(三弥井書店)
- 『梵灯庵主返答書』…廣木一人他『梵灯庵主返答書』注釈Ⅰ～Ⅲ
- 『九州問答』…廣木一人他『九州問答』注釈Ⅰ・Ⅱ
- 『連歌付合の事』『連珠合璧集』…『連歌論集 一』(三弥井書店)
- 『和歌集心鉢抄抽肝要』…『和歌集心鉢抄抽肝要』(大学堂書店)
- 『連歌十様』…廣木一人他『連歌十様』注釈
- 『連歌手爾葉口伝』『一紙品定之灌頂』…『連歌論新集』(古典文庫)
- 『密伝抄』『砌塵抄』…『連歌論集 三』(三弥井書店)
- 『梅春抄』…『連歌論集 四』(三弥井書店)
- 『連理秘抄』『十問最秘抄』『ささめ』と『吾妻問答』…『連歌論集 俳論集』(日本古典文学大系)
- 『宗養三卷集』『連歌奥儀明鏡秘集』『連歌秘袖抄』…『古典文庫』『宗

養連歌伝書集

- 『連歌教訓』…『連歌論集 下』(岩波文庫)
- 『連通抄』…『島津忠夫著作集第五卷』(和泉書院)
- 『饅頭屋本節用集』『易林本節用集』『黒本本節用集』…中田祝夫『改訂新版 古本節用集六種 研究並びに総合索引』(勉誠出版)
- 『禁好詞』…金子金治郎『連歌総論』(桜楓社)

参考文献

- 金子金治郎『連歌論の研究』(桜楓社、一九八四年六月)
- 片岡伸江『連歌詞の位置―嫌詞の流れから』(『国語と国文学』67、一九九〇年二月)
- 『日本国語大辞典 第二版』(小学館)
- 『角川古語大辞典』(角川書店)
- 『岩波古語辞典 補訂版』(岩波書店)
- 『和歌大辞典』(明治書院)
- 『歌枕歌ことば辞典 増訂版』(笠間書院)
- 『時代別国語大辞典 室町時代編』(三省堂)
- 『国史大辞典』(吉川弘文館)
- 『連歌辞典』(東京堂出版)
- 『歌枕辞典』(東京堂出版)
- 『俳文学大辞典 普及版』(角川学芸出版)

- 金子金治郎『菟玖波集の研究』（風間書房、一九六五年十二月）
- 金子金治郎『新撰菟玖波集の研究』（風間書房、一九六九年四月）
- 金子金治郎『連歌論の研究』（桜楓社、一九八四年六月）
- 金子金治郎『連歌総論』（桜楓社、一九八七年九月）
- 木藤才藏『連歌史論考』（明治書院、一九七一年～一九七三年）
- 斎藤義光『中世連歌の研究』（有精堂出版、一九七九年九月）
- 水上甲子三『中世歌論と連歌』（全通企画出版、一九七七年八月）

（ひろき・かずひと／本学名誉教授）（かむら・まさえ／本学大学院博士後期課程学生）（てらお・まり／本学大学院博士後期課程学生）（ぼにー・まっくるーあ／本学大学院博士後期課程学生）（につた・あんな／本学大学院博士前期課程学生）（いくた・よしほ／お茶の水女子大学大学院博士後期課程学生）（あさい・みほ／お茶の水女子大学大学院博士後期課程学生）（のつと・じえふりー／スタンフォード大学大学院博士後期課程学生）